

2021年6月11日

各 位

会 社 名 株式会社フェニックスバイオ
代 表 者 名 代 表 取 締 役 島 田 卓
(コード番号：6190 東証マザーズ)
問 合 せ 先 専務取締役管理部長 田村 康弘
(TEL 082-431-0016)

<マザーズ>投資に関する説明会開催状況について

以下のとおり、投資に関する説明会を開催いたしましたので、お知らせいたします。

○開催状況

開催日時：2021年6月11日（金）
開催方法：決算説明会のオンデマンド配信
開催場所：自社ホームページ
<https://phoenixbio.co.jp/ir/>
説明会資料名：2021年3月期決算説明会資料

【添付資料】

投資説明会において使用した資料

以 上

A photograph of a modern building facade with horizontal lines, featuring the Phoenix Bio logo and name in a white rectangular sign. The sky is blue with light clouds.

株式会社フェニックスバイオ（6190）

2021年3月期決算説明会資料

高度生命科学で新時代を拓く

 Phoenix Bio

2021年6月

目次

業績ハイライト	3
事業の現況	6
今後の展開	11
研究開発の状況	21
関連学会発表・論文	23
業績予想	27



高度生命科学で新時代を拓く



PhoenixBio

業績ハイライト

2021年3月期決算ハイライト（連結）

- ・売上高は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、顧客の研究開発活動が停滞した影響により、対前期比で減少
- ・販売費及び一般管理費は、営業経費の減少等により対前期比△14.6%になったものの、売上高の減少により赤字で着地

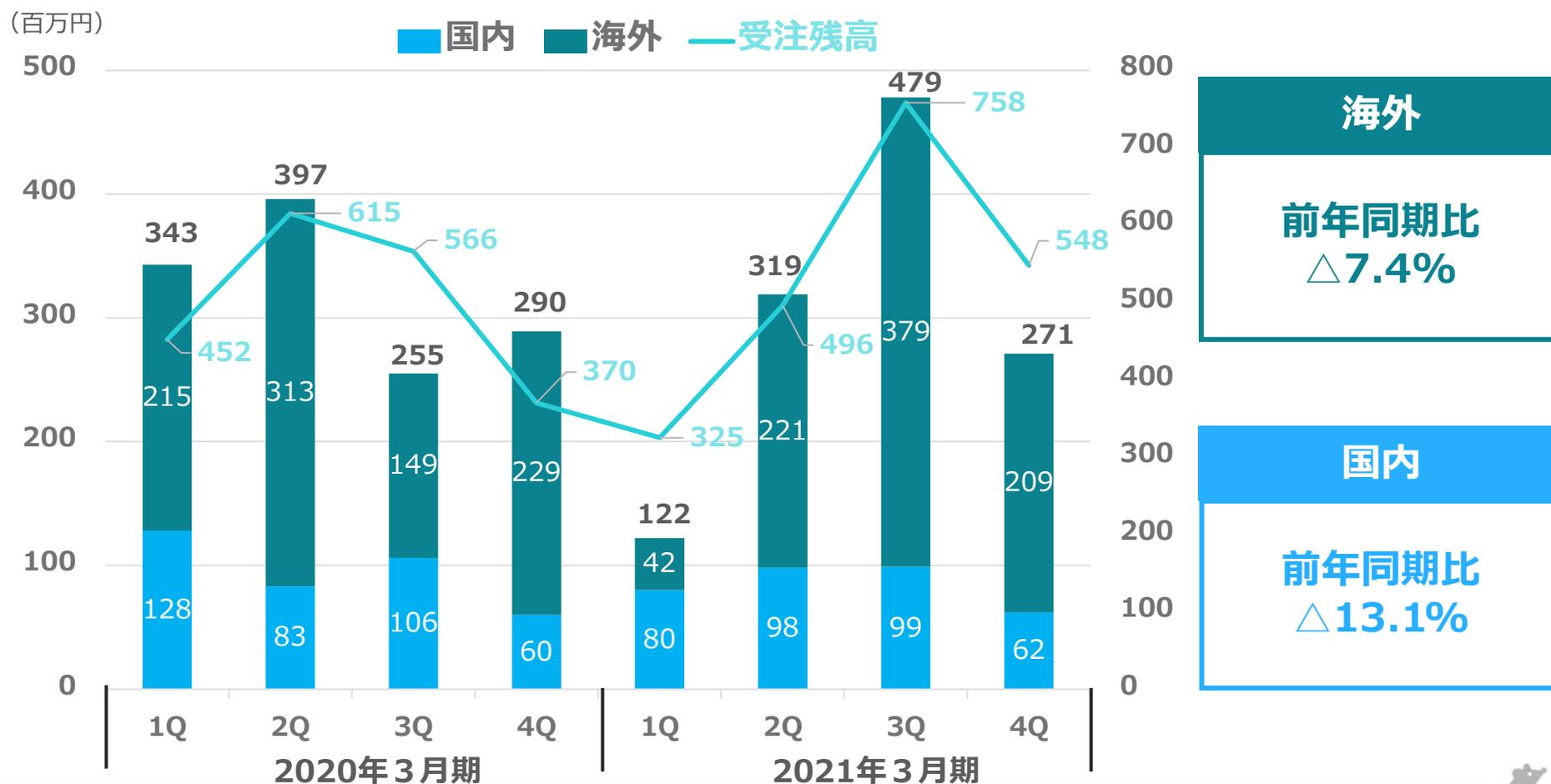
(百万円)

	2020年3月期 [実績]	2021年3月期 [実績]	対前年同期比
売上高	1,310	1,013	△22.7%
薬効薬理分野	521	431	△17.4%
安全性等分野	788	582	△26.2%
営業利益	△146	△276	—
経常利益	△125	△223	—
親会社株主に帰属する 当期純利益	△415	△238	—
1株当たり当期純利益	△141.84	△73.60	—



地域別受注高推移

- 新型コロナウイルス感染症の影響により、当第1四半期は前年同期比△64.3%
- 第2四半期以降は、顧客のラボ業務再開とともに受注は回復。



高度生命科学で新時代を拓く



事業の現況

蓄積された学会発表、論文データの活用



学会



論文



PXBマウス関連の
学会発表・論文数

600 以上

学会の中止が相次ぐ中、
PXBマウス、PXB-cellsに関心を持つ
製薬企業、研究機関の要望に対応

2020年5月より
Webセミナー開始



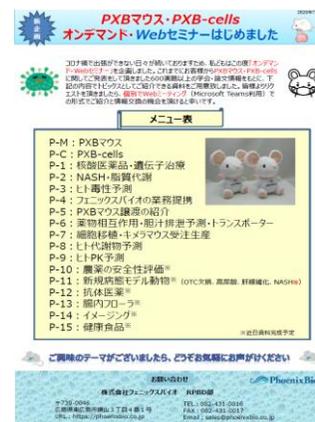
■特にリクエストの多いテーマ

- ✓ 核酸医薬品、遺伝子治療
- ✓ NASH、脂質代謝
- ✓ ヒト毒性予測
- ✓ ヒトPK予測 など

<弊社HP>



<顧客案内>



参加者からは好評を得ており、
多くの受注獲得につながる



海外展開と事業拠点

主要市場は北米を中心とする海外市場であり販路拡大のため北米に事業拠点を展開しています。



KMT Hepatech Inc (2017年12月完全子会社化)
 カナダ アルバータ州エドモントン
 PXBマウス及びPXB-cellsの生産

PhoenixBio USA Corporation
 米国 ニューヨーク州
 PXBマウス事業の海外販売拠点

CMHL Consortium LLC
 米国 デラウェア州
 製薬企業との共同研究に関する運営

株式会社フェニックスバイオ
 広島県東広島市
 PXBマウス及びPXB-cellsの生産
 受託試験サービス
 研究開発

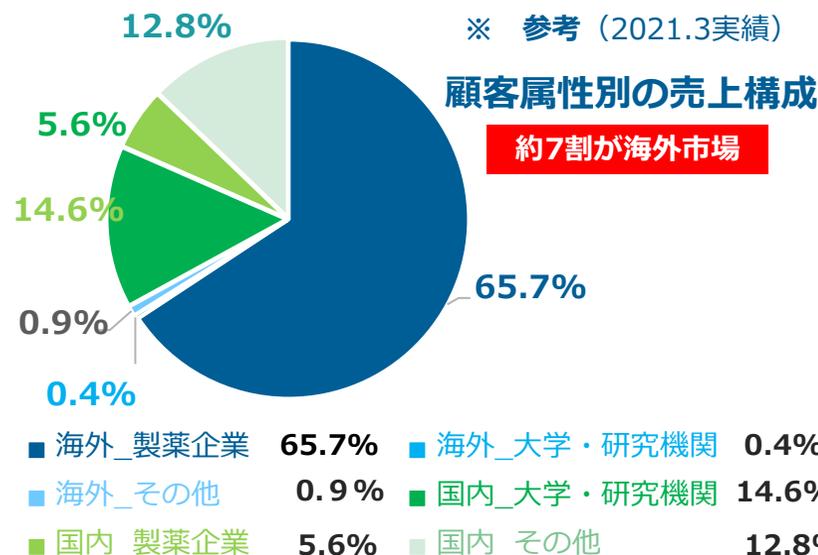
University of Southern California
 米国 カリフォルニア州
 共同研究 (研究員の派遣)

フェニックスバイオグループ

協力機関・提携先



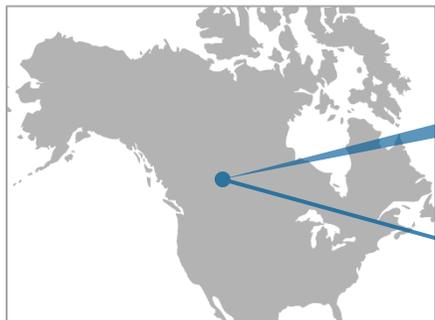
PXB-mouseの生産拠点



PXBマウスの生産体制整備（北米 新施設の稼働）

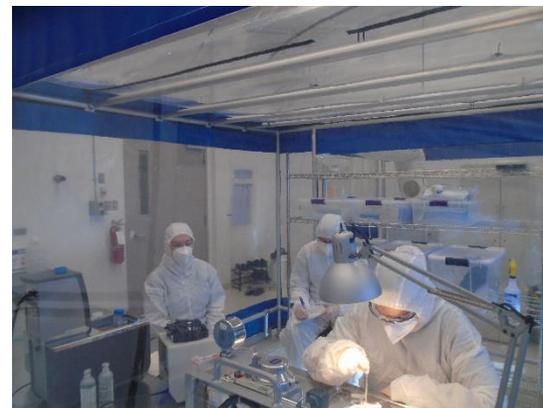
主要市場である北米でのPXBマウス供給体制を整備。

子会社KMT Hepatech社（カナダ）：PXBマウス生産のための新施設が2020年8月から稼働。



2020年8月 新施設稼働

KMT Hepatech Inc
(2017年12月完全子会社化)
PXBマウス及びPXB-cellsの生産



Biotechnology Business Development Center
(Edmonton, AB, Canada)



新施設（飼育室）



CROとの業務提携

当社は、受託試験サービスに対する幅広い需要に対して、前臨床試験の実績が高いCROとの業務提携を進めることで、質の高いサービス提供体制を整備し、幅広い需要の取り込みを図ってまいりました。

一方、海外市場におけるCRO開拓が喫緊の課題でありましたが、この度、安全性等分野での高い実績を有するBioanalytical Systems, Inc. DBA Inotiv（米国）と業務提携を締結し、海外市場でのサービス提供体制の整備を図りました。また、国内市場においても、新たにLSIM安全研究所ならびに残留農薬研究所と業務提携を締結し事業拡大を図っています。

【海外提携先】



【国内提携先】



Axcelead Drug Discovery Partners株式会社



株式会社新日本科学



積水メディカル株式会社
積水メディカル株式会社



ハムリー株式会社

新規提携先

2020年9月 (米国 インディアナ州)
analyze. answer. advance.

Bioanalytical Systems, Inc. DBA Inotiv

2020年6月 LSIM安全科学研究所

株式会社LSIM安全研究所

2021年1月 一般財団法人 残留農薬研究所
The Institute of Environmental Toxicology

一般社団法人 残留農薬研究所



高度生命科学で新時代を拓く



今後の展開

事業計画のアウトライン

安全性等
分野

戦略的市場

本分野は市場規模が大きく今後の事業拡大を図る上で重要な市場と位置付けている

課題としては、未だPXBマウス認知度が低く、実績及び学術データの蓄積が十分でない

- プレゼンスの向上
- 次世代医薬品開発での利用促進 P12参照
 - PXBマウス・PXB-cellsの有用性検証 P13~14 (コンソーシアム)参照
 - 関連学会発表・論文情報 P23~25参照

次世代医薬品
(核酸医薬品等)



製薬分野
(医薬品)

農薬等の
安全性評価

化学品分野
への拡大



化学品分野
(農薬)

ターゲットとする領域

顧客の属性

薬効薬理
分野

肝炎ウイルス
(HBV、HCV等)

現在の収益の柱
将来的には収束

肝炎ウイルスに代わる薬効薬理モデルの開発が急務



- 新製品の開発
- 高脂質代謝機能を備えるヒト肝細胞の開発 P17参照
 - NASHモデルの開発 P18参照
 - 遺伝子疾患モデルの開発 P19参照

生活習慣病

食品分野
への拡大



食品分野
(機能性食品)

NASH



製薬分野
(医薬品)

その他

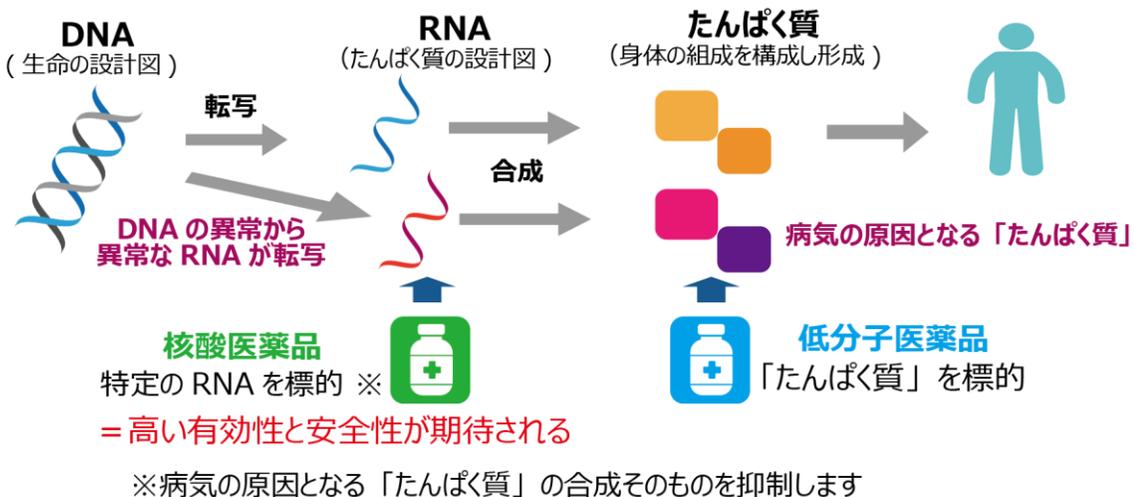


安全性等分野の拡大 ① 新世代医薬品開発での利用促進

技術革新による創薬モダリティの多様化



医薬品の開発は、技術革新により従来の「たんぱく質」を標的とした低分子医薬から、ヒトの「DNA」や「RNA」を標的とした、より有効性と安全性が高い次世代医薬品へシフトしています。



次世代医薬品開発での PXB マウスの使用

ヒトの RNA を標的としているため従来の実験動物では評価が困難

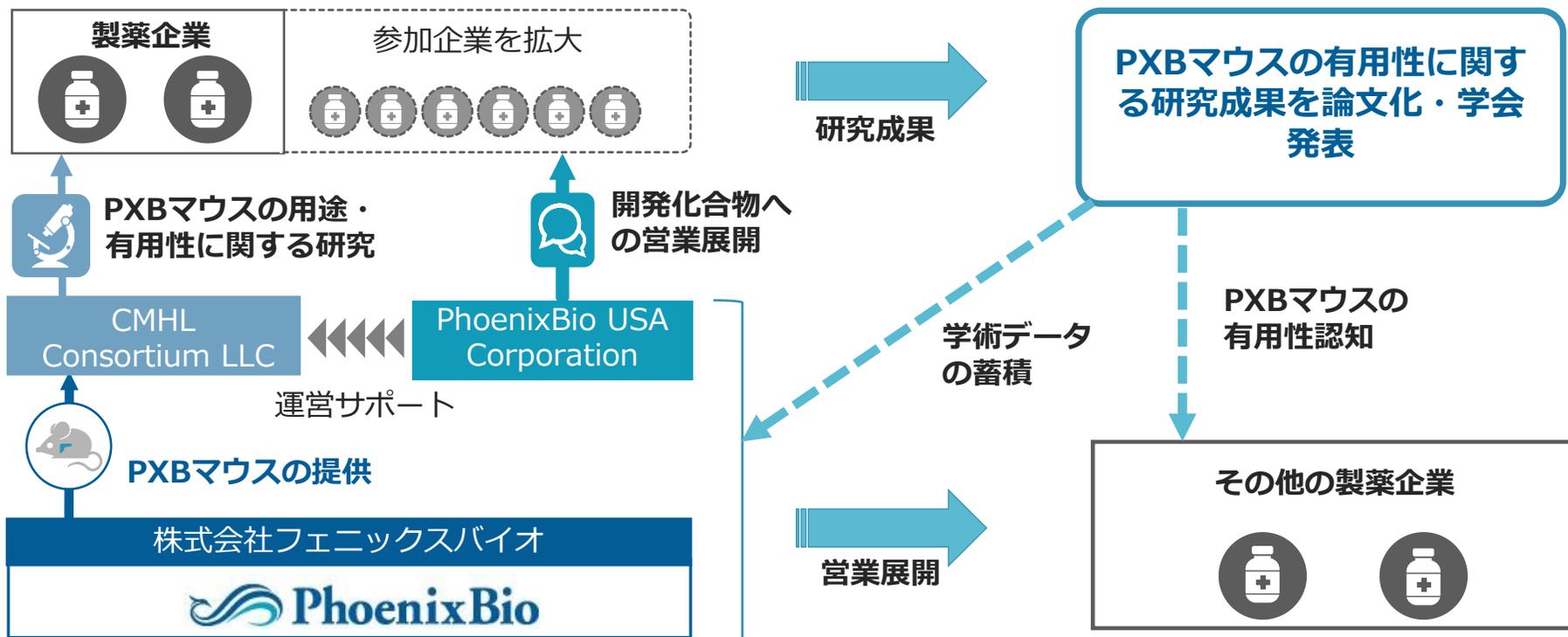


PXB マウスはヒトの DNA を持つため次世代薬品開発の評価に期待されています



安全性等分野の拡大 ②-1 有用性検証（コンソーシアム）

2016年から製薬企業と共同でPXBマウス（PXB-cellsを含む）に関する有用性の検証を開始
 参加製薬企業で研究成果を学会発表及び論文化し、これをプロモーションとして活用する計画



現在、製薬企業8社、CRO2社及び大学1校が参画しPXBマウスの有用性に関する研究を実施中、さらに海外製薬企業数社と参画について協議中



安全性等分野の拡大 ②-2 有用性検証（コンソーシアム）

コンソーシアムにおける共同研究成果の論文掲載 2020年7月

論文

Prediction of Human Disproportionate and Biliary Excreted Metabolites Using Chimeric Mice with Humanized Liver

掲載雑誌名：Drug Metabolism and Disposition (ASPET：米国薬理学会)

著者：Takeda Pharmaceutical Company Limited, Cambridge, MA

医薬品開発において、実験動物では検出されず、ヒトでのみ検出される主要代謝物は disproportionate metabolite（以下、「DM」）と呼ばれている。本研究では、DMを持つ4種の化合物をPXBマウスとSCIDマウス^(注)に投与した。その結果、PXBマウスではすべての化合物でDMが検出され、SCIDマウスではほぼ検出されなかった。4化合物のうち、抗ヒスタミン薬であるDesloratadineのDMは、臨床において投与早期(0-4時間)のサンプルからは検出されるが、投与24-48時間には検出されない。この現象はPXBマウスで再現され、DMはDesloratadineを投与したPXBマウスの胆汁中から検出された。このDMは腸内において腸内細菌によりさらに代謝されるため、投与24-48時間には検出されないことが判明した。PXBマウスは、臨床では採取することができない胆汁を採取し、医薬候補品やその代謝物のクリアランスを調べることができることから、ヒトにおける薬物動態を理解するために非常に有用なツールである。以上の4つのDM実験の結果から、PXBマウスは医薬品開発において、ヒト特異的代謝物の検出に有用であると考えられた。

※注. 本研究では、PXBマウス（ヒトの肝細胞を持つマウス）と比較する実験動物（コントロール動物）としてSCIDマウスを使用。

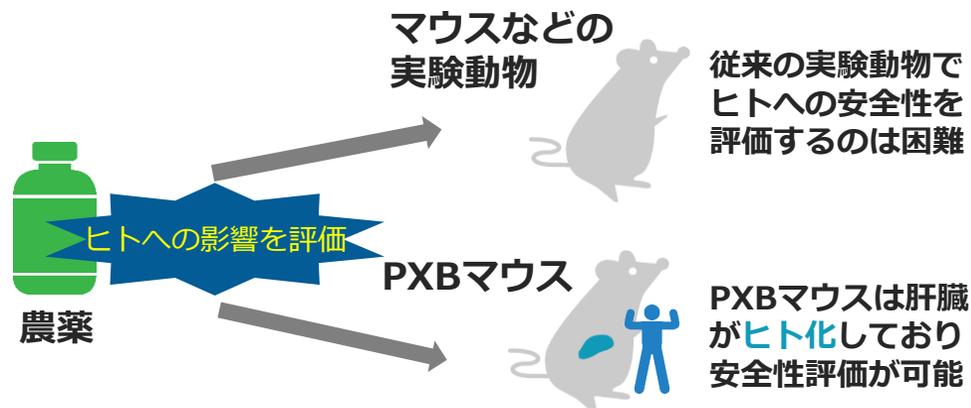


安全性等分野の拡大 ③-1 化学品の安全性評価

農薬の安全性評価については、2004年のOECDテストガイドライン採択をはじめとして、近年、ヒトに対する安全性評価の重要性が増しています。



農薬に対して科学的な(ヒトの健康被害)安全性評価が求められています。



現在、安全性評価においては、ヒトにおける発がん性はげっ歯類を用いたアッセイにより評価されています。しかしながら、この結果をそのままヒトにあてはめられないケースが存在するため、げっ歯類による発がん作用様式を解明し、その作用様式がヒトにおいても起こりうるか検証することが重要となっています。

これに対し、欧州規制当局から、住友化学工業のPXBマウスを用いた新規開発材の試験結果が評価され被験物質のヒトにおける肝発がん性のリスク評価を実施した例が紹介されました。



安全性等分野の拡大 ③-2 化学品の安全性評価

住友化学株式会社様より発表された下記のPXBマウス関連の学術論文が、「FEATURED paper」に選ばれました。

※「FEATURED paper」とは、様々な影響力のある科学を反映した論文として、雑誌（TOXICOLOGICAL SCIENCES）で各号2～3の記事に焦点をあてて紹介されています。

論文

Comparison of the Hepatic Effects of Phenobarbital in Chimeric Mice Containing Either Rat or Human Hepatocytes With Humanized Constitutive Androstane Receptor and Pregnane X Receptor Mice

掲載雑誌名：TOXICOLOGICAL SCIENCES, 177(2), 2020, 362–376

著者：住友化学株式会社 Dr. Yamada, et. al.

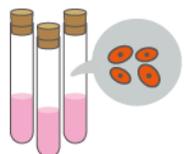
化学品（農薬）の安全性評価において、ヒト肝細胞を持つキメラマウスであるPXBマウスを用いて、ヒトに対する安全性を評価を行った結果、ヒト肝毒性予測においてPXBマウスは有用であった。一方、当該化学品のげっ歯類に対する影響について、ラットの肝臓をもつキメラマウスや遺伝子組換え動物（hCAR/hPXRマウス）とヒト肝細胞キメラマウスであるPXBマウスとでは反応性において差異があることを示すことを科学的に実証した。



薬効薬理分野：新製品の開発 ① 高脂質代謝機能を備えるヒト肝細胞の開発

平成30年度戦略的基盤技術高度化支援事業（経済産業省）に採択された「脂質代謝研究素材として高脂質代謝機能と高利便性を備えるヒト肝細胞の開発」を秋田県総合食品研究センターと共同開発 ※2021年3月特許出願の公開

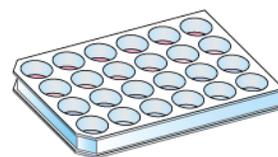
凍結ヒト肝細胞



PXBマウス®

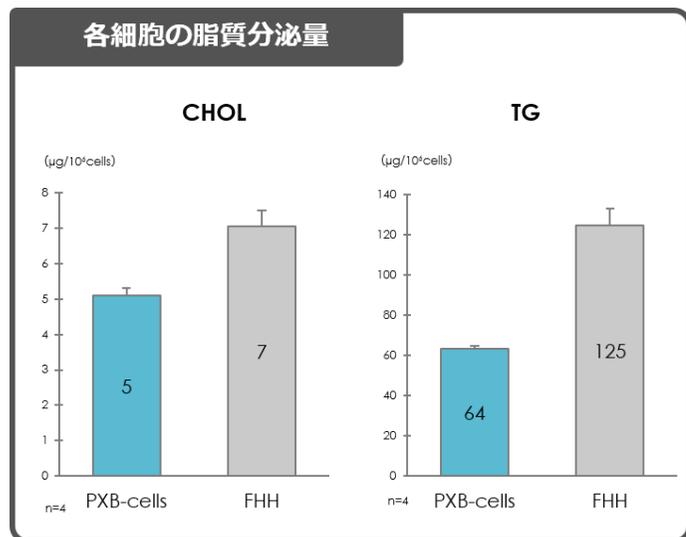


PXB-cells®

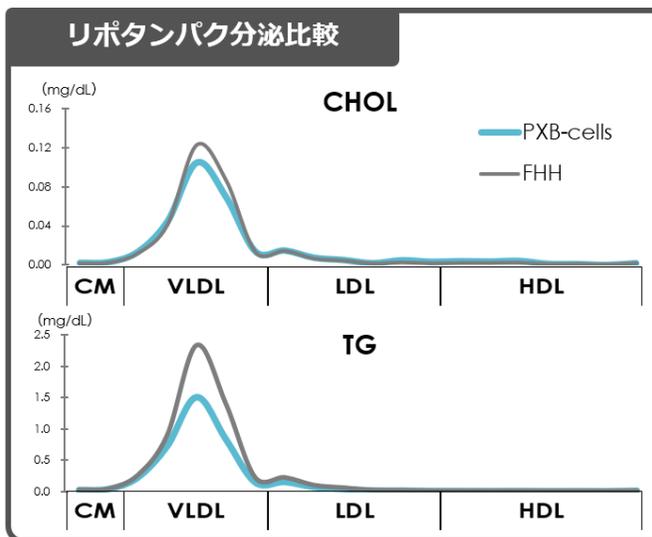


通常のPXB-cellsの製造工程と比べて、使用する培地及び培養期間等の条件を、脂質代謝研究素材として最適化しています。

各細胞の脂質分泌量



リポタンパク分泌比較



脂質プロファイル比較：ヒト肝細胞とPXB-cells LA (仮称)

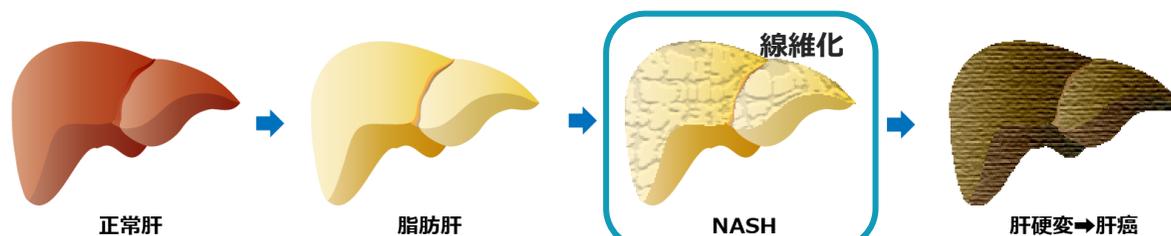
PXB-cells LAは人に近い脂質プロファイルを示しています。



薬効薬理分野：新製品の開発 ② NASHモデルの開発

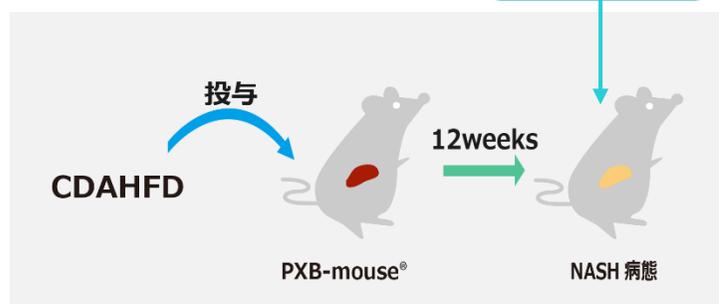
NASHとは？

NASHとは非アルコール性脂肪肝炎であり、アルコールをほとんど摂取していないにも関わらず脂肪肝（肝臓に中性脂肪が蓄積された状態）になり、重症化して肝臓に炎症が起こる疾病です。さらにNASHは、肝硬変、肝がんへと進行する可能性があり、現在、多くの製薬企業において治療薬が開発されています。



① CDAHFD投与による NASH病態モデルの作製

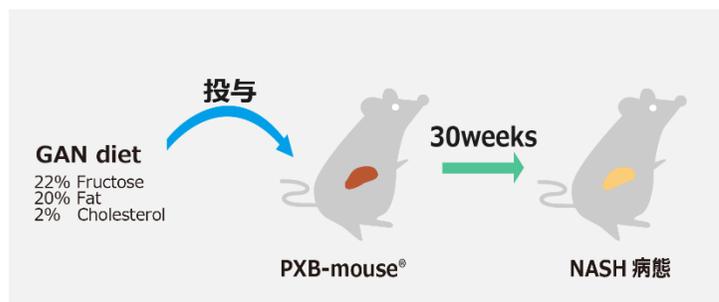
2019年4月
EASL The International Liver Congress 2019 (Austria) で発表



当社の開発した左記のNASHモデルは、双方とも肝線維化をはじめブルーニング等も再現しており、マウスを用いたNASHモデルでは再現することができない**ヒトNASH患者の特徴を持つ新規NASHモデル**です。

② GAN Diet投与による NASH病態モデルの作製

2019年10月
The Liver Meeting 2019 (アメリカ) で発表



このNASHモデルマウスは、ヒトのNASH病態を示す肝細胞に効果のある医薬品の開発に寄与できるものと考えています。



薬効薬理分野：新製品の開発 ③ その他 疾患モデルの開発

OTC遺伝子欠損ヒト肝細胞キメラマウスの開発

(国立研究開発法人 国立成育医療研究センターとの共同開発)

OTC遺伝子欠損症（オルニチントランスカルバミラーゼ欠損症）とは？

小児慢性特定疾病に指定された先天性代謝異常のひとつで、尿素サイクルの二段階目の反応（カルバミルリン酸とオルニチンからシトルリンを合成）を司る酵素がオルニチントランスカルバミラーゼ(OTC)を欠損したアミノ酸代謝異常症である。OTC欠損症は尿素サイクル異常症の中では最も頻度が高い。X連鎖性遺伝性疾患であるが、女性でもX染色体不活化の偏りの程度によって新生児期発症から無症状例まで様々な症候を呈する。

尿素サイクル異常症による高アンモニア血症は、異化の亢進（発熱、絶食など）、蛋白質の過剰摂取などによって生じる。臨床症状は非特異的な神経学的異常であることが多く、嘔吐、哺乳力低下、多呼吸、けいれん、意識障害、行動異常、発達障害などがみられる。男児では新生児発症が多い。女児では肝機能障害を契機に発見されることがある。（疫学：8万人に1人）

※出典元「小児慢性特定疾病情報センターホームページ」から引用

本モデル動物は、単一遺伝子欠損などの肝臓疾患を持つ患者のヒト肝細胞を当社マウスへ移植することにより疾患モデルマウスが作製できることを証明していますが、マウスの中でヒト疾患肝細胞を増殖させることも可能となり、この技術を用いることにより増殖させた疾患肝細胞についても、新規医薬品の開発などへの利用が期待されます。

2020年12月4日プレスリリース

国立研究開発法人 国立成育医療研究センターと「OTC遺伝子欠損ヒト肝細胞キメラマウス」の（商用）利用許諾契約締結



高度生命科学で新時代を拓く



PhoenixBio

研究開発の状況

新しい技術の創出

薬効薬理分野では、将来的に収束が予想される抗肝炎ウイルス薬の薬効評価にかわる新たな高付加価値サービス及び疾患モデル・ツールの開発が喫緊の課題です。当社では、国内外の大学ならびに研究機関と共同研究を実施しており、新たな疾患モデル開発を通じて事業拡大を狙います。

一方、戦略的市場と位置付ける安全性等分野においては、PXBマウス及びPXB-cellsをもとにした評価系の開発・アプリケーションの開発が必須となっており、毒性評価系の開発に注力するとともに市場拡大が見込まれる核酸医薬品の安全性評価で事業拡大を狙います。

薬効薬理分野	疾患モデル動物の開発	非アルコール性脂肪性肝炎モデル (NASHモデル)		2019年10月学会発表
		アルコール性脂肪性肝炎モデル (ASHモデル)		
		OTC欠損症モデル動物の実用化研究		使用許諾契約締結
		ヒト肝細胞の老化及び癌化研究		
薬効薬理分野	評価ツール開発	高脂質代謝機能を備えるヒト肝細胞開発	経済産業省サポイン事業	2019年12月学会発表
	評価系の開発	核酸医薬品の薬効評価		論文発表
		核酸医薬品の安全性・毒性評価	AMED研究	
安全性等分野	評価系の開発	PXB-cellsを用いた肝毒性試験系開発		AMED研究
		人体模倣システム		
		毒性評価法 (h-ALT, etc)		
		ヒト免疫機能を持つヒト肝細胞キメラマウス開発		AMED研究
その他		ヒト肝細胞キメララット		JST OPERA事業
		次世代ホスト動物開発		



高度生命科学で新時代を拓く



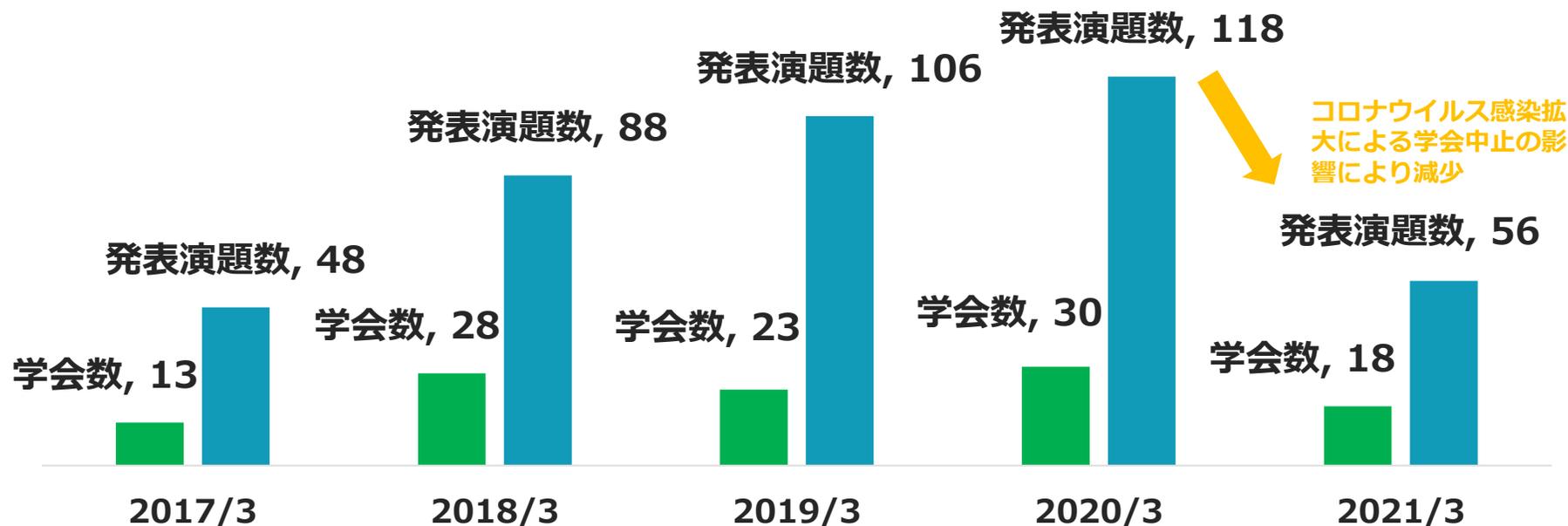
関連学会発表・論文

安全性等分野の拡大 ③-1 関連学会発表・論文発表

これまで、製薬企業、大学並びに公的研究機関との共同研究に注力。この成果により、多数の研究者の方から多くの当社製品に関する学会発表が行われ、2020年3月期は、国内外の30の学会で118演題の発表が行われました。

2021年3月期につきましては、コロナウイルス感染拡大による学会の中止が相次ぎ、この影響により減少、現在はオンラインによる開催が定着。

研究者によるPXBマウス及びPXB-cells関連の学会発表数



関連論文 (2021年3月期)

	タイトル	著者
2021年1月	Dual Agonist of Farnesoid X Receptor and G Protein-coupled Receptor TGR5 Inhibits Hepatitis B Virus Infection in Vitro and in Vivo	Ito, K. Okumura, A. S. Takeuchi J Watashi, K. Inoue, R. Yamauchi, T. Sakamoto, K. Yamashita, Y. Iguchi, Y. Une, M. Wakita, T. Umezawa, K. Yoneda, M. (愛知医科大学)
2020年12月	Humanized liver mouse model with transplanted human hepatocytes from patients with ornithine transcarbamylase deficiency	Sugahara G, et. al. (株式会社フェニックスバイオ)
2020年12月	Identification of a novel long-acting 4'-modified nucleoside reverse transcriptase inhibitor against HBV	Nobuyo Higashi-Kuwata, Sanae Hayashi, Hiroki Kumamoto, Hiromi Ogata-Aoki, Debananda Das, David Venzon, Shin-Ichiro Hattori, Haydar Bulut, Mai Hashimoto, Masaki Otagiri, Nobutoki Takamune, Naoki Kishimoto, David A avis, Shogo Misumi, Masakazu Kakuni, Yasuhito Tanaka, Hiroaki Mitsuya (東京国立国際医療センター研究所)
2020年10月	Culture density contributes to hepatic functions of fresh human hepatocytes isolated from chimeric mice with humanized livers: Novel, long-term, functional two-dimensional in vitro tool for developing new drugs	Chihiro Yamasaki, et. al. (株式会社フェニックスバイオ)
2020年10月	Development of an in vivo delivery system for CRISPR/Cas9-mediated targeting of hepatitis B virus cccDNA	Dr. Mohammad Enamul Hoque Kayesh, et. al. (鹿児島大学)
2020年9月	Detection of acute toxicity of aflatoxin B1 to human hepatocytes in vitro and in vivo using chimeric mice with humanized livers	Yuji Ishida, et. al. (株式会社フェニックスバイオ)
2020年8月	Fluoxazolevir inhibits hepatitis C virus infection in humanized chimeric mice by blocking viral membrane fusion	Ma, C. D. Imamura, M. Talley, D. C. Rolt, A. Xu, X. Wang, A. Q. Le, D. Uchida, et. al. (NIH, 広島大学)
2020年8月	Decomposition profile data analysis of multiple drug effects identifies endoplasmic reticulum stress-inducing ability as an unrecognized factor	Katsuhisa Morita 1, Tadahaya Mizuno 2, Hiroyuki Kusuvara (東京大学)
2020年8月	Characterization of plasma protein binding in two mouse models of humanized liver, PXB mouse and humanized TK-NOG mouse.	Maki Miyamoto, et. al. (武田薬品工業株式会社)



関連論文 (2021年3月期)

	タイトル	著者
2020年7月	Comparison of the hepatic effects of phenobarbital in chimeric mice containing either rat or human hepatocytes with humanized constitutive androstane receptor (CAR) and pregnane X receptor (PXR) mice (hCAR/hPXR mice).	Yamada, et. al. (住友化学株式会社) P19参照
2020年7月	Discovery of Hydroxyamidine Based Inhibitors of IDO1 for Cancer Immunotherapy with Reduced Potential for Glucuronidation	Steenek, C. Kinzel, O. Anderhub, S. Hornberger, M. Pinto, S. Morschhaeuser, B. Braun, F. Kleymann, G. Hoffmann, T. (Phenex Pharmaceuticals AG,)
2020年7月	Prediction of Human Disproportionate and Biliary Excreted Metabolites Using Chimeric Mice with Humanized Liver	Suguru Kato, Abhi Shah, Mihaela Plesescu, Yoshinari Miyata, Jayaprakasam Bolleddula, Swapan Chowdhury and Xiaochun Zhu (Takeda Pharmaceutical Company Limited, Cambridge, MA) P17参照
2020年6月	Signal activation of hepatitis B virus-related hepatocarcinogenesis by upregulation of SUV39h1	Chayama, K. et. al. (広島大学)
2020年6月	Predictability of human pharmacokinetics of drugs that undergo hepatic organic anion transporting polypeptide (OATP)-mediated transport using single-species allometric scaling in chimeric mice with humanized liver: Integration with hepatic drug metabolism	Sanoh, S. et. al. (広島大学)
2020年6月	Species differences in liver accumulation and metabolism of nucleotide prodrug sofosbuvir	Wang, T. Babuis, D. Park, Y. Niu, C. Kim, C. Zhao, X. Lu, B. Ma, B. Muench, R. C. Sperger, D. Ray, A. S. Murakami, E. (Gilead Sciences, Inc,)
2020年5月	A novel evaluation method for determining drug-induced hepatotoxicity using 3D bio-printed human liver tissue	Ide, I. Nagao, E. Kajiyama, S. Mizoguchi, N. (東京大学、Cyfuse Biomedical K.K.社)
2020年4月	Engineering Cellular Biosensors with Customizable Antiviral Responses Targeting Hepatitis B Virus	Matsunaga, S. Jeremiah, S. S. Miyakawa, K. Kurotaki, D. Shizukuishi, S. Watashi, K. Nishitsuji, H. Kimura, H. Tamura, T. Yamamoto, N. Shimotohno, K. Wakita, T. Ryo, A. (横浜市立大学、国立国際医療センター)



高度生命科学で新時代を拓く

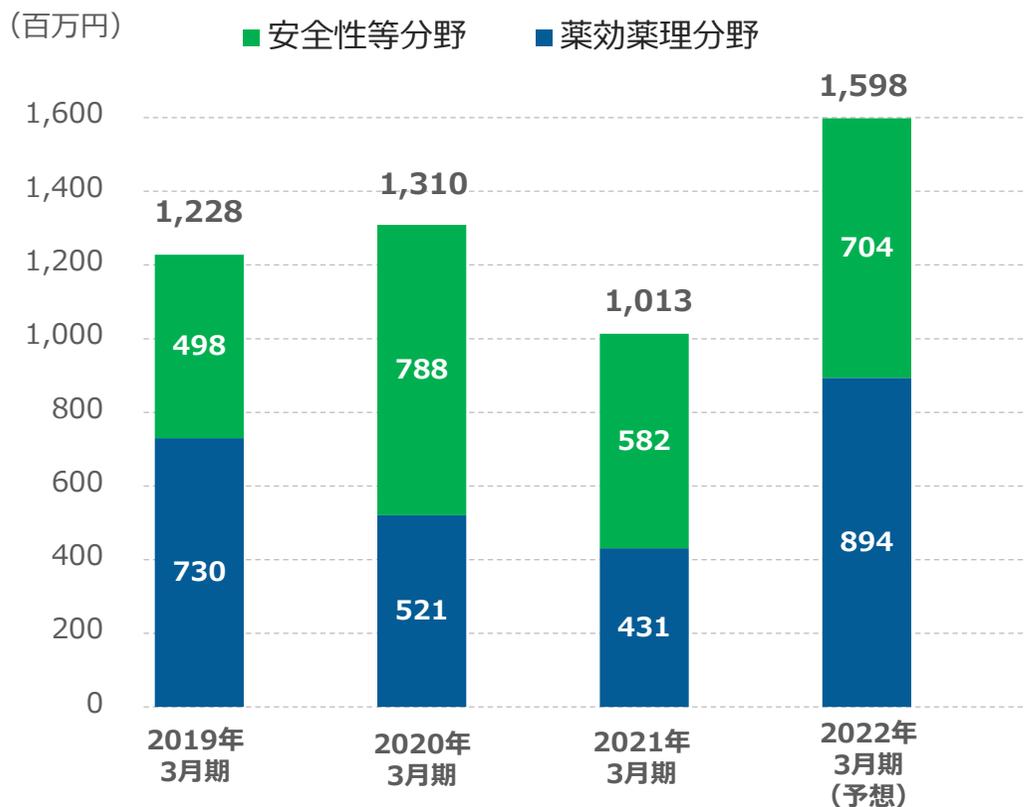


業績予想

2022年3月期 業績予想（売上高：分野別）

- 売上高はB型肝炎試験が牽引し、対前期比で大きく増加する見通し
- 新規開拓に一定の制限があるものの、WEBを活用した営業により過去最高の売上見込み

売上高の推移（PXBマウス事業）



■ 安全性等分野

- ✓ 核酸医薬品、遺伝子治療、NASH等でPXBマウスの利用拡大。
- ✓ 新型コロナウイルスの影響から回復基調であり、対前期比で増加見通し。

■ 薬効薬理分野

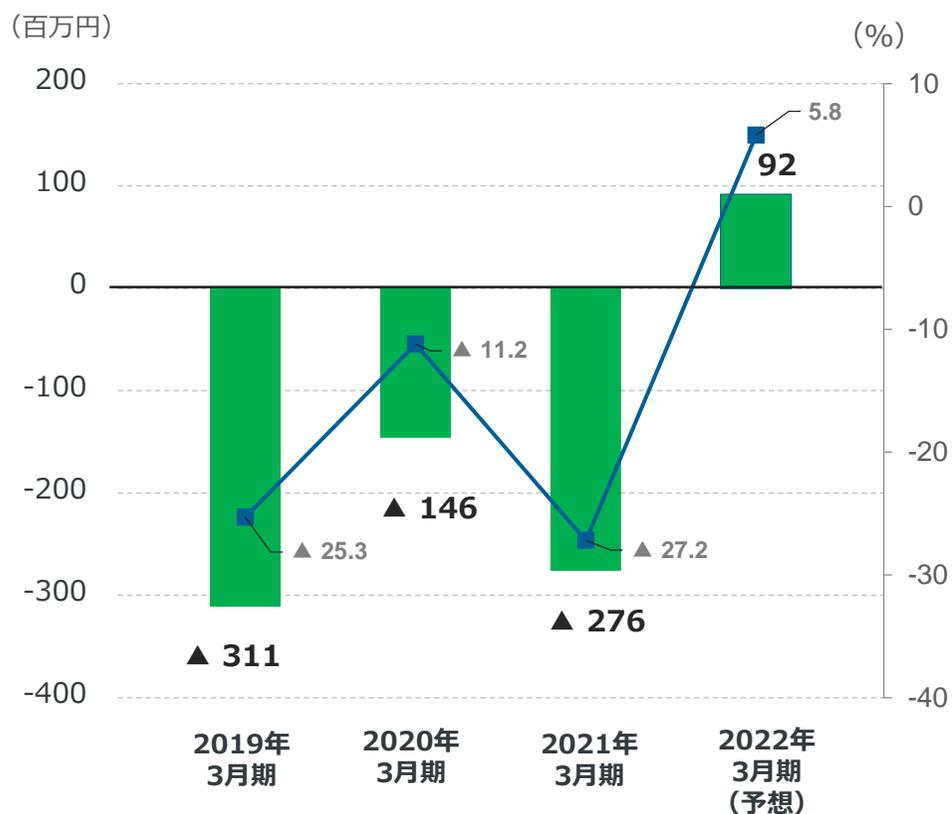
- ✓ 海外は抗B型肝炎薬の開発進展に伴い、好調に推移する見通し。
- ✓ 国内は公的予算を背景に前期並みになる見通し。



2022年3月期 業績予想（営業利益）

- 売上高の増加により、5期ぶりの黒字に転換する見通し
- 売上増加に伴い、売上原価、販売管理費は増加するものの、平行して経費削減に努める

営業利益・利益率の推移



■ 売上原価

- ✓ 対前期比+16.2%
- ✓ 海外マウス生産施設の本格稼働に伴い、減価償却費が増加
- ✓ CROへの試験委託増加により、外注加工費が増加

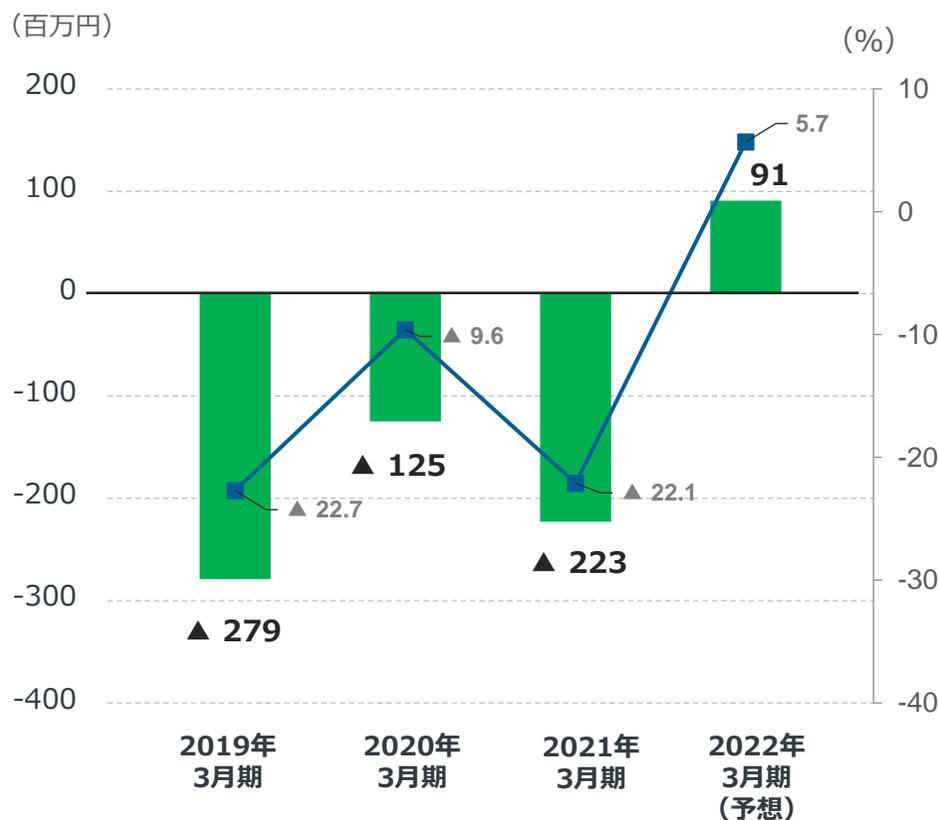
■ 販売費及び一般管理費

- ✓ 対前期比+17.0%
- ✓ コンソーシアムの活動を含め、研究開発費が増加
- ✓ PXBマウス、PXB-cellsの頒布のため、販売促進費が増加

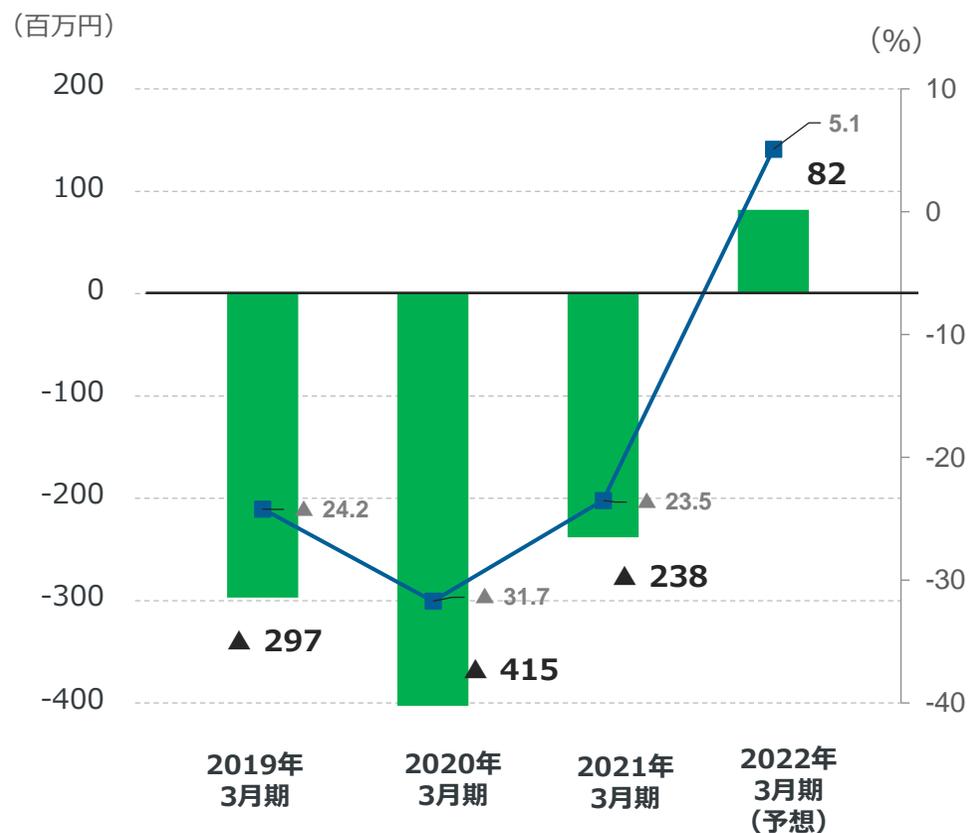


2022年3月期 業績予想（経常利益・親会社株主に帰属する当期純利益）

経常利益・利益率の推移



親会社株主に帰属する当期純利益・利益率の推移



ご留意事項

本資料は、株式会社フェニックスバイオの業界動向及び事業内容について、株式会社フェニックスバイオによる現時点における予定、推定、見込み又は予想に基づいた将来展望についても言及しております。

これらの将来展望に関する表明の中には、様々なリスクや不確実性が内在します。既に知られたもしくは未だに知られていないリスク、不確実性その他の要因が、将来の展望に関する表明に含まれる内容と異なる結果を引き起こす可能性があります。

株式会社フェニックスバイオの実際の将来における事業内容や業績等は、本資料に記載されている将来展望と異なる場合がございます。

本資料における将来展望に関する表明は、現在において利用可能な情報に基づいて株式会社フェニックスバイオによりなされたものであり、将来の出来事や状況を反映して、将来展望に関するいかなる表明の記載も更新し、変更するものではありません。

